



望月
佛教大辭典



第八卷
增補

昭和十一年十二月五日 初版発行
昭和三十三年三月二十五日 増訂版発行
昭和四十八年一月十日 八版発行

望月仏教大辞典 第八卷 増補



発行所 株式会社 世界聖典刊行協会

東京本部 東京都豊島区上池袋一三九一十七
電話東京(九一五)一〇七八

支部 東京都上京区油小路一条下ル
電話京都(四三二)〇九一六
振替 京都五〇六六

編纂代表者 塚本善隆

著作権所有者 沢本貫

発行者 沢本富子

印刷者 松村保

明和印刷株式会社

補遺望月佛教大辭典成るに際して

故望月博士は完成した佛教大辭典を前にして、「惡戰苦闘滿三十年、自らもまた關係出版業者も共にし
ばしば財政の苦境に陥り、事業放棄に至ること一再ならず、後半生を斯業の爲に捧げて終に成つた」と述
懐し感激して居られるのであるが、齡古稀に近づいた博士は、更にこの畢生の愛兒の育成の爲に全面的補
正と補遺冊刊行に残生を捧げようと企てられ、事とげずして長逝せられた。この博士最後の念願を實現し
ようと、世界聖典刊行協會が補正望月佛教大辭典刊行事業をとりあげた。わたくし共、博士の學恩をうけ、
或は大辭典の價值を知るものは、本當に心から喜び事業への協力と奉仕を誓いあつた。かつて出版業社を
再三破局に追いこんだこの大辭典刊行事業は、今度も亦中々の難事業で、編輯に任ずる學者の主張は出版事
業家の要請としばしば衝突した。しかし互ひに事業中絶の破局をさける爲に苦慮し妥協し、期日を遅延し
乍らも本文五卷、最近までを補つた大年表の刊行もできた。ところでこの間に、世界聖典刊行協會は會長
鈴木大拙博士の年來の念願であつた世界の東洋學、佛教學に劃期的貢獻をなす「影印北京版西藏大藏經刊
行」という、大辭典以上に困難な大事業に取り組んだ。二つの佛教大出版事業が、協會の經濟を苦しめた
のみならず、様々の困難が重疊してきて、佛教學界未曾有の聖業の前途も危むまれたが、しかし大谷大學
を中心とした學者と協會運營者との不撓不屈の精進苦闘は、終に政府の補助、財界の協賛、諸外國の協力
をかり得て、見事に西藏大藏經を世界に送るに至つた。それと共に、一時中絶の悲境にあつた大辭典補遺

刊行の事業も再び急ぎ完成を求められることになった。大辭典刊行の進展が西藏大藏經刊行の實現に導き、西藏大藏經刊行完成がまた望月辭典の完成をまねくこととなつた。學者と事業家と講讀者との間にはさまつて久しく苦慮してきたわたくしは、この二つの聖なる大出版が互ひに因となり縁となりあつて共に完成へと進んだ迹を顧みて、誰にともなしに合掌したくなるのである。

補遺項目は既に故博士の手で準備せられていたものを基として廣く諸書をあさり新研究を探り、千項目余を選出し、故博士門下の、辭典編輯を助けてきた金山、香月兩學士と、東京大學の中村元教授と共に項目を検討し、各方面の學者に執筆を依頼した。既刊大辭典に入れられなかつた項目を、望月辭典の根本方針に隨ひ、一々出典を明確にし、參考文獻を網羅して更に精密な研究への手引にするような原稿にかき上げることは、實は容易ならざる事業であつた。運營者側からと講讀者からの督促急なるものあり、またそれはそむき難きものであるので、編輯者會議で一千項目を六百項に減少して整理につとめたが、これも亦約束期限を數月越えて完成し得ず。而もこれ以上の遅延は豫約講入者に対して申しわけなく、また事業運營を破局に陥れる恐れさえありと聞くに及んでは、如何ともすることを得ず、原稿の出典對校、文体統一などの最後の仕上げの難業を擔當せられる金山氏の、力の限りを懇請し、三百四十七項をもつて一先づ補遺冊を出して、故望月博士と同様に惡戦苦闘した大辭典補正刊行全八冊を成就することにした。編輯の任に當つたものとしてまた一學究として、不十分なる補遺冊を送ることは、實に恥多くかつ講讀者にすまぬと思ひわづらうのではあるが、かかる大出版の成就には運營者とのよき意味の妥協なくしては、すべてを破局に導くことを了察せられたい。しかしここに敢て「一先づ」と記したのは補遺作製事業が今後もつづくことを明か

にしたものである。世界聖典刊行協會は、協會事業の使命にもとづいて、望月佛教大辭典補遺の事業を今後も繼續することを確約せられた。わたくし共は大半出來ている多數補遺原稿を、數年後には更に完備したものに仕上げて大辭典講讀者に送ることができらるであらうし、また十年後には、現代の急速な東洋學・佛教學の進歩によつて補正増加された第二、第三補遺冊を出版し得るだらう。かくて故博士の大辭典は、學界の進歩と共に成長して行き、末長く學徒の友となつて行くであらう。かくの如き大辭典補遺事業の繼續が、聖典刊行協會の事業の一に確約されたことを、謹んで故博士の靈前にもひろく學界の諸賢にも告げ、更に近き將來によりよき補遺冊を増刊することを誓ひ、遲延を重ねて而も不十分な補遺冊しか出し得なかつたことをおわび申上げたい。但し本冊には香月、水谷兩氏の努力によつて既刊和漢語索引の追加と既刊五冊分の西藏語索引とを附載し得たことは喜んで頂けることと思ふ。

補遺原稿の執筆等に協力を頂いた諸氏は（五十音順）

青 木 文 教 氏	石 川 良 昱 氏	石 田 瑞 磨 氏
伊 藤 眞 徹 氏	今 西 順 吉 氏	入 矢 義 高 氏
瓜 生 津 隆 眞 氏	江 田 俊 雄 氏	大 山 公 淳 氏
香 川 孝 雄 氏	柏 原 祐 泉 氏	香 月 乘 光 氏
勝 又 俊 教 氏	金 岡 秀 友 氏	金 山 正 好 氏
鎌 田 茂 雄 氏	河 和 田 唯 賢 氏	北 西 弘 氏
紀 野 一 義 氏	光 地 英 學 氏	三 枝 充 惠 氏

佐藤達玄氏	鹽入良道氏	獅子王圓信氏
篠原壽雄氏	白川良純氏	勝呂信勝氏
關正郎氏	高崎直道氏	高峯了州氏
竹田聽州氏	玉城康四郎氏	田村圓澄氏
田村晃祐氏	田村芳朗氏	竺沙雅章氏
塚本俊孝氏	津本了學氏	藤堂恭俊氏
長尾雅人氏	服部正明氏	花山勝友氏
原實氏	平川彰氏	藤吉慈海氏
古田紹欽氏	堀池春峰氏	前田惠學氏
前田專學氏	牧田諦亮氏	松野純孝氏
間野潛龍氏	水谷幸正氏	水野弘元氏
村上速水氏	八木昊應氏	泰本融氏
山田一止氏	横井聖山氏	芳村修基氏
若林隆光氏		

の多數に上つた。就中、東京にある金山正好氏は、原稿仕上げの責任をとり、土田勝彌氏は補遺冊の出版に關する編輯並に校正等の責任をとつて獻身せられたし、京都にある香月、藤堂、牧田、水谷の諸氏は故博士の門下生として或は同宗の後學として終始編集事務に奔走せられた。これら多數の諸學者の協力なし

には補遺は出でず、而も執筆をたまはつた原稿の多數は今回の補遺冊に收め得ない事情に陥つた。心から感謝と共におわびを申上げる次第である。

昭和三十三年八月二十五日

京都大學人文科學研究所にて

塚 本 善 隆

望月佛教大辭典增訂版刊行完了に際して

願れば、昭和二十四年四月京都相國寺に於て世界聖典刊行協會が、鈴木大拙博士の發願のもとに生れてここに十有年、誠に長い年月でありました。併し乍ら過去十有年の間、當協會のとつた経路は、思えば波瀾萬丈の苦難の道ではありませんが、又た反面、佛陀の大慈大悲に育まれて幸多き成長を續け得たものと存じます。

先ず、事業としては五十種に近い佛書を刊行し、次に着手した望月佛教大辭典は、七年の歳月を閲し、ここに此の増補冊の出版を以て一應の完成を見るに至り、且つ當協會が發會當初より念願し着手した世紀の大事業と考えられます。「影印北京版西藏大藏經」の刊行も國內公私各方面の絶大なる御支援に加うるに、國外の大いなる理解と支援によりまして、既に本年三月、壹百五十壹卷の老なる出版を完了せしめることが出来ました。誠に佛恩の宏大なるにただ合掌あるのみであります。加えて亦た、徳は孤ならず必ず隣りあり、眞に會長鈴木大拙老師の御人徳の偉大なるを痛感致すものであります。

この望月佛教大辭典は、七年前、佐々木隆彦、川崎久敏兩氏の御幹旋により、故望月信亨博士彌生未亡人より私が増補の出版を確約申上げて御譲り戴いたものであります。爾來、門下の諸先生を始め、故博士の學恩を受けられた皆様の御協力を得て、着々此の事業は進展したのでありますが、併し乍ら其の間、協會運営の經理擔當者たる私の未熟且つ未經験の故に、幾多の紆餘曲折に遭遇せざるを得ずして今日に至つ

たものであります。さような譯で、本増補冊は、編集責任者塚本善隆博士の序文にある如く、充分意を盡し得なかつた事は誠に遺憾であります。一應故望月博士の御遺稿を中心に七年間の辛苦と共に編集刊行を完了したものであります。併乍ら當協會はこれを以て我が事成れりとする者ではなく、塚本博士の言はるる如く、更に第二、第三の増補を刊行すべく故望月博士の御遺志を體し、必死の努力を續けることを御約束する者であります。

最後にこの増補冊を故望月信亨博士の御靈前に供え、且つ之を世に送り出すに際し、塚本博士、金山・土田兩先生を始め、多くの努力を寄せられた關係者各位に對し茲に厚く御禮申上る次第であります。

昭和三十三年八月二十五日

世界聖典刊行協會

常任理事 澤 本 貫

凡 例

- 一、本索引追補は辭典第七卷（索引）の中、和漢語索引に於ける項目、頁數記載の不足を補つたものである。
- 一、原索引の頁數、段の上中下及び追加すべき場處を指示し、追加語・追加頁數及び削除すべき語と頁數を記載した。

凡 例

一、本索引は、辭典第一卷より第五卷（一頁―五〇八八頁）迄の本文所載の西藏語の中、長文に渉るものを除き、其他を掲出したものである。

一、本索引の編次は、各語を *Sarat Chandra Das: Tibetan-English Dictionary.* に據り、西藏字字母の順序に配列した。

一、各語の下に記入した羅馬數字は本文の頁、abc は段の上中下を示す。

一、本文中に誤植あるものは本索引に於て之を訂正した。

凡 例

一、本索引は、辭典第一卷より第五卷（一頁―五〇八八頁）迄の本文所載の西藏語の中、長文に渉るものを除き、其他を掲出したものである。

一、本索引の編次は、各語を *Sarat Chandra Das: Tibetan-English Dictionary* に據り、西藏字字母の順序に配列した。

一、各語の下に記入した羅馬數字は本文の頁、abc は段の上中下を示す。

一、本文中に誤植あるものは本索引に於て之を訂正した。

毘達磨教及び大乘修多羅なり」とあつて、阿毘達磨大乘經なる特定の經を指すものでないとも考えられ、明確でない。しかし一般には、攝大乘論本は、阿毘達磨大乘經に述べられている十勝相を基として、大乘一般の要義を概説したものであると認められている。

〔文獻〕 漢譯四本對照攝大乘論(佐々木月樵)、意識論より見たる唯識思想史(結城令閑)、攝大乘論研究(宇井伯壽)・根本中と空(宮本正尊)、密教文化二六(高田仁覺)、阿毘達磨大乘經について、E. Lanotte: La Somme du Grand Véhicule d'Asanga. 等。

アマラコーシャ **Amara-kośa** 〔書名〕

アマラの字庫の意。インドのアマラシンハ *Amarasinha* の作つた梵語辭典ナマリンガアムシヤーサナ *Nāmaṅgaśāna* (「名と性に關する研究」の意)に對する通稱。また三部から成るのトリカーンデー *Trikāṇḍī* ともいう。内容 第一部には、神・天界・星・時の分類、思惟・感情・音樂・言語・舞踊・地界・地獄等の語彙を收め、第二部には、水・海・魚・植物・尺度・道・都市・山・野菜・男女・裝飾品・四姓・病氣・宗教・戦争・農事・商業の語彙を收め、第三部には、人名・物名・同義語・同音異義語・語の性に關する法則を收めている。全篇アムシヤトッパ *Aṃśūpā* 調の韻文で、總計一萬三千語を含む。注釋等 本書は現存する梵語の類語及び同音異義語の辭典として、首尾完備した最古のものであるばかりでなく、類書中の白眉として古來、文法のパーニニと並稱され、注釋

アマラ

書は五十部存したと傳えられるが、最も重要なものは、十一世紀のクシラヌヴァーミン *Kṣīrasvāmin* のものであり、その他に十二世紀のマヘーシウアラ *Mahēśvara* ・スプーティ *Subhūti* (Śāndra) ・サルヴァアーナンダ *Sarvānanda* ・十五世紀のラーヤムクタ *Rāyamukta* の注釋も著名である。また西藏大藏經丹珠爾には、キールティヤンドラ *Kīrticandra* 等の藏譯 *Hchi-ba med-paḥi mdod ces bya-ba* (梵名 *Amarakośa-nāma*) 及びダルマバーラバドラ *Dharmapālabhadra* の藏譯したスプーティの注釋 *Hchi-ba med-paḥi mdod kyi rgya-cher hgral-pa hrod-kyiḥi ba mo shes-bya-ba* (梵名 *Amarakośa-tīkā mahenu-nāma*) がある。出版 原文出版にはマヘーシウアラの注釋を含むキールホン *Kielhorn* の刊本 *Amarakośa, with the Commentary of Mahēśvara. Enlarged by Ragunath Shastri Talekar. Edited with an Index by Chintamani Shastri Tharte, under the Superintendence of Dr. F. Kielhorn, Bombay, 1882.* クシラヌヴァーミンの注釋を含むゴウヴィンド・オカ *Govind Oka* の刊本 *The Nāmalinguśāsana (Amarakośa) of Amarasiṃha, with the Commentary (Amarakośaśāna) of Kṣīrasvāmin. Edited with Critical Notes by Krishnaji Govind Oka. Poona, 1912-13, 2 vols.* がある。著者 アマラシンハはまたアマラデーヴァ *Amaradeva* 或いは略してアマラ *Amara* ともいふ、佛教徒であつたが、本書には特に佛教語を重視した形跡はない。年代は甚だ不明瞭でマクドネル *A. A. Macdonell* は西紀五五〇―七五〇年の間としてゐる。一説には、カリダーサ *Kaṇḍaśa*

アマラ

等と共にグプタ王朝のヴィクラマアーディチャ *Vikramāditya* 王の九寶 *navaratna* の一に數えているが明確でない。トリカーンダシェーシヤ *Trīkāṇḍaśeṣa* はアマラコーシャの補遺として貴重な辭書であり、その中には佛教梵語を多く收載し、また碑銘や俗語も採録している。〔文獻〕 A. A. Macdonell: *History of Sanscrit Literature*; *India's Past—A Survey of her Literature, Religions, Languages and Antiquities*, M. Winternitz: *Geschichte der indischen Literatur*, Bd. III. 等。

アライセキゼン 新井石禪 〔人名〕

曹洞宗の僧。元治元年(一八六四)十二月岩代國梁川町に生れた。十二歳同町興國寺の新井如禪について得度、明治十二年(一八七九)東京駒込吉祥寺内の曹洞宗本校に入り、十四年埼玉縣杉戸町善徳寺に



新井石禪(洗心録)

住し、ついで同縣幸松村淨春院に移り、翌年本校を卒業、畔上株仙に随侍して東北及び北陸を巡

アライ

頁	段	項 (場 處)	追 加	削 除
一	四	阿字本不生	四七五	
二	一	阿說示。	三九五	
三	四	阿那律		四三〇
四	二	(右の次)	一一(人)	
五	二	阿羅漢。	三三三	
六	二	阿羅漢。	三三三	
七	二	阿羅漢。	三三三	
八	二	阿羅漢。	三三三	
九	二	阿羅漢。	三三三	
一〇	二	阿羅漢。	三三三	
一一	二	阿羅漢。	三三三	
一二	二	阿羅漢。	三三三	
一三	二	阿羅漢。	三三三	
一四	二	阿羅漢。	三三三	
一五	二	阿羅漢。	三三三	
一六	二	阿羅漢。	三三三	
一七	二	阿羅漢。	三三三	
一八	二	阿羅漢。	三三三	
一九	二	阿羅漢。	三三三	
二〇	二	阿羅漢。	三三三	
二一	二	阿羅漢。	三三三	
二二	二	阿羅漢。	三三三	
二三	二	阿羅漢。	三三三	
二四	二	阿羅漢。	三三三	
二五	二	阿羅漢。	三三三	
二六	二	阿羅漢。	三三三	
二七	二	阿羅漢。	三三三	
二八	二	阿羅漢。	三三三	
二九	二	阿羅漢。	三三三	
三〇	二	阿羅漢。	三三三	
三一	二	阿羅漢。	三三三	
三二	二	阿羅漢。	三三三	
三三	二	阿羅漢。	三三三	
三四	二	阿羅漢。	三三三	
三五	二	阿羅漢。	三三三	
三六	二	阿羅漢。	三三三	
三七	二	阿羅漢。	三三三	
三八	二	阿羅漢。	三三三	
三九	二	阿羅漢。	三三三	
四〇	二	阿羅漢。	三三三	
四一	二	阿羅漢。	三三三	
四二	二	阿羅漢。	三三三	
四三	二	阿羅漢。	三三三	
四四	二	阿羅漢。	三三三	
四五	二	阿羅漢。	三三三	
四六	二	阿羅漢。	三三三	
四七	二	阿羅漢。	三三三	
四八	二	阿羅漢。	三三三	
四九	二	阿羅漢。	三三三	
五〇	二	阿羅漢。	三三三	
五一	二	阿羅漢。	三三三	
五二	二	阿羅漢。	三三三	
五三	二	阿羅漢。	三三三	
五四	二	阿羅漢。	三三三	
五五	二	阿羅漢。	三三三	
五六	二	阿羅漢。	三三三	
五七	二	阿羅漢。	三三三	
五八	二	阿羅漢。	三三三	
五九	二	阿羅漢。	三三三	
六〇	二	阿羅漢。	三三三	
六一	二	阿羅漢。	三三三	
六二	二	阿羅漢。	三三三	
六三	二	阿羅漢。	三三三	
六四	二	阿羅漢。	三三三	
六五	二	阿羅漢。	三三三	
六六	二	阿羅漢。	三三三	
六七	二	阿羅漢。	三三三	
六八	二	阿羅漢。	三三三	
六九	二	阿羅漢。	三三三	
七〇	二	阿羅漢。	三三三	
七一	二	阿羅漢。	三三三	
七二	二	阿羅漢。	三三三	
七三	二	阿羅漢。	三三三	
七四	二	阿羅漢。	三三三	
七五	二	阿羅漢。	三三三	
七六	二	阿羅漢。	三三三	
七七	二	阿羅漢。	三三三	
七八	二	阿羅漢。	三三三	
七九	二	阿羅漢。	三三三	
八〇	二	阿羅漢。	三三三	
八一	二	阿羅漢。	三三三	
八二	二	阿羅漢。	三三三	
八三	二	阿羅漢。	三三三	
八四	二	阿羅漢。	三三三	
八五	二	阿羅漢。	三三三	
八六	二	阿羅漢。	三三三	
八七	二	阿羅漢。	三三三	
八八	二	阿羅漢。	三三三	
八九	二	阿羅漢。	三三三	
九〇	二	阿羅漢。	三三三	
九一	二	阿羅漢。	三三三	
九二	二	阿羅漢。	三三三	
九三	二	阿羅漢。	三三三	
九四	二	阿羅漢。	三三三	
九五	二	阿羅漢。	三三三	
九六	二	阿羅漢。	三三三	
九七	二	阿羅漢。	三三三	
九八	二	阿羅漢。	三三三	
九九	二	阿羅漢。	三三三	
一〇〇	二	阿羅漢。	三三三	

頁	段	項 (場 處)	追 加	削 除
一	一	有。	四三三	
二	一	有爲解脫	二六五	
三	一	有執受。	二六五	
四	一	(有情の次)	二六五	
五	一	優陀延王	二六五	
六	一	(雲棲念佛派の次)	二六五	
七	一	慧解脫。	二六五	
八	一	慧能。	二六五	
九	一	穢土。	二六五	
一〇	一	懷海(支那)	二六五	
一一	一	(右の次)	二六五	
一二	一	永平寺。	二六五	
一三	一	延壽(支那)。	二六五	
一四	一	(圓寂の次)	二六五	
一五	一	圓珍。	二六五	
一六	一	圓通。	二六五	
一七	一	(緣質の次)	二六五	
一八	一	王舍城。	二六五	
一九	一	往生即成佛。	二六五	
二〇	一	送火。	二六五	
二一	一	(音樂天の次)	二六五	
二二	一	圓城寺。	二六五	
二三	一	遠方便。	二六五	
二四	一	(伽耶山の次)	二六五	
二五	一	迦尸國。	二六五	
二六	一	迦膩色迦王。	二六五	
二七	一	迦耶。	二六五	
二八	一	迦留陀夷。	二六五	
二九	一	我見。	二六五	
三〇	一	有。	二六五	
三一	一	有爲解脫	二六五	
三二	一	有執受。	二六五	
三三	一	(有情の次)	二六五	
三四	一	優陀延王	二六五	
三五	一	(雲棲念佛派の次)	二六五	
三六	一	慧解脫。	二六五	
三七	一	慧能。	二六五	
三八	一	穢土。	二六五	
三九	一	懷海(支那)	二六五	
四〇	一	(右の次)	二六五	
四一	一	永平寺。	二六五	
四二	一	延壽(支那)。	二六五	
四三	一	(圓寂の次)	二六五	
四四	一	圓珍。	二六五	
四五	一	圓通。	二六五	
四六	一	(緣質の次)	二六五	
四七	一	王舍城。	二六五	
四八	一	往生即成佛。	二六五	
四九	一	送火。	二六五	
五〇	一	(音樂天の次)	二六五	
五一	一	圓城寺。	二六五	
五二	一	遠方便。	二六五	
五三	一	(伽耶山の次)	二六五	
五四	一	迦尸國。	二六五	
五五	一	迦膩色迦王。	二六五	
五六	一	迦耶。	二六五	
五七	一	迦留陀夷。	二六五	
五八	一	我見。	二六五	
五九	一	有。	二六五	
六〇	一	有爲解脫	二六五	
六一	一	有執受。	二六五	
六二	一	(有情の次)	二六五	
六三	一	優陀延王	二六五	
六四	一	(雲棲念佛派の次)	二六五	
六五	一	慧解脫。	二六五	
六六	一	慧能。	二六五	
六七	一	穢土。	二六五	
六八	一	懷海(支那)	二六五	
六九	一	(右の次)	二六五	
七〇	一	永平寺。	二六五	
七一	一	延壽(支那)。	二六五	
七二	一	(圓寂の次)	二六五	
七三	一	圓珍。	二六五	
七四	一	圓通。	二六五	
七五	一	(緣質の次)	二六五	
七六	一	王舍城。	二六五	
七七	一	往生即成佛。	二六五	
七八	一	送火。	二六五	
七九	一	(音樂天の次)	二六五	
八〇	一	圓城寺。	二六五	
八一	一	遠方便。	二六五	
八二	一	(伽耶山の次)	二六五	
八三	一	迦尸國。	二六五	
八四	一	迦膩色迦王。	二六五	
八五	一	迦耶。	二六五	
八六	一	迦留陀夷。	二六五	
八七	一	我見。	二六五	
八八	一	有。	二六五	
八九	一	有爲解脫	二六五	
九〇	一	有執受。	二六五	
九一	一	(有情の次)	二六五	
九二	一	優陀延王	二六五	
九三	一	(雲棲念佛派の次)	二六五	
九四	一	慧解脫。	二六五	
九五	一	慧能。	二六五	
九六	一	穢土。	二六五	
九七	一	懷海(支那)	二六五	
九八	一	(右の次)	二六五	
九九	一	永平寺。	二六五	
一〇〇	一	延壽(支那)。	二六五	

[illegible]

